

ドイツ語の動詞の人称変化形をかぞえてみる

ードイツ語教育の立場からー

城 岡 啓 二

0. 文法に「完全な表」は必要か？

1. 20冊の初級文法読本を対象に各人称変化形をかぞえてみる
2. 三人称単数形の使用率が高いのは普遍的である
3. 「会話」と「読み物」をくらべる
4. おわりに

0. 文法に「完全な表」は必要か？

まず、動詞の人称変化形を文法の授業で習うときのことから考えてみたい。学習者はそれぞれの人称変化形に重要度の区別をつけずに習う。たとえば、*wohnen* や *arbeiten* の人称変化形の完全な表が出てきて、つまり、*ich wohne, ich arbeite, du wohnst, du arbeitest, er/sie/es wohnt, er/sie/es arbeitet, wir wohnen, wir arbeiten, ihr wohnt, ihr arbeitet, sie wohnen, sie arbeiten, Sie wohnen, Sie arbeiten* というふうにより人称敬称の *Sie* に対応する人称変化形をいれて7つの人称変化形がすべて揃った表が提示され、そのあとに続く練習問題でいくつかの動詞について7つの人称変化形すべてを（二人称敬称形は三人称複数形と同形ということで省略されて6つの人称変化形かもしれないが）練習することになる。これが普通の教わり方ではないだろうか。ということは、学習者はすべての人称変化形がつかれるようになることを期待されているわけだ。また、教える側も各人称変化形の重要度の違いといったことをあまり意識していないのではないだろうか。私の場合、これまで、この人称変化形とこの人称変化形がとくに重要だからしっかり覚えてくださいといったことを授業で言ったことはないし、特定の人称変化形に重点を置いた練習は少なくとも意識的にはしてこなかった。文法規則を文法規則として独立させて考えるなら、各人称変化形の扱いに差をつける必要

はない。むしろ、規則としての完全さや規則としての分かりやすさということでは各人称変化形の扱いには差がないほうがいい。文法の表は空欄のない「完全な表」のほうがいい。しかし、生きた言語を実用的に使うための言わば効率のよい文法を目指すということになれば話は違ってくるのではないだろうか。ほとんど使われていない人称変化形など、覚えるのは後回しにしたほうが効率的であるし、大文字の Sie に対応する人称変化形をいれて7つの人称変化形を完全にマスターすることよりもっと基本的で重要な文法規則があれば、そちらを先に習得するほうが間違いなく得策である。分かり切ったことであるが、これまでこのような「ずるい」ことは文法研究者の考察の対象からはずれがちだったのではないかと思う。とはいっても、時代は少しずつではあるが効率や実用性を目指して動いているようである。ドイツ文法の学習内容の変遷を注意深くたどれば、人称代名詞の2格が初級文法の表からはずされたり、疑問詞 was の2格がやはり文法の表からはずされるりなど、あえて「完全な表」を求めない現実的な行き方もとられるようになってきているようだ。

ちょっとしたエピソードを紹介しておこう。規則としての完全さを文法に求めることが必ずしも言語の現実には即していないことが分かるいい例だと思う。私が大学院の学生だった頃の話なのだが、ドイツの大学で助手として日本語を教えていたドイツ人と知り合う機会があった。そのひとから日本語の動詞の変化について尋ねられたことがあった。「ござる」の変化についてだったのだが、「ござらない」という形が文法的に可能かどうか、あるいは「ござらぬ」のほうが正しいかどうかということが知りたいというのだった。なんと答えていいかわからず、奇妙な感じを抱いたのを今でもはっきりと覚えている。「ござらない」という形は聞いたことがないような気がするし、「ござらぬ」という形にしても現代日本語ではもはや普通には使われない形だ。質問に対する違和感を説明しようとしたのであるが、そのひとから、いや、「ござる」はそれでも現代日本語の重要動詞なんだし、文法で動詞の変化を学生に教えるときに「ござらぬ」か「ござらない」かはきわめて重要な問題だという意味のことを言われ、思ってもみなかった方向に話題が転じ、少なからず驚いた。「ござる」が現代日本語でも極めて頻繁に使用される重要語のひとつだというのは言われるまで気づかなかったが、間違いではない。「ございます」という表現の中にある「ござる」のことだったのである。それならたし

かに現代日本語でも頻度の高い重要語だと言えるだろう。しかし、「ごぞいます」以外のかたちではもはやほとんど使われていない。だから、「ごぞらない」になるかとたずねられても、日本語のネイティブスピーカーでもどう答えていいかわからないし、そんなことを問題にしてもたいして意味はない。今ならそう思う。このエピソードで私が言いたいことは、我々ドイツ語教師も同じようにつまらない文法的問題を殊更問題にして日々の授業をおこなっているのではないか、ということである。それほど必要でもないし、使われてもいない人称変化形まで学習することを入門期の学生に強要しているのではないか。たとえば、waschen の過去形 wusch の二人称単数形が語尾に e が入らずに wuchst になるか、語尾に e が入って wuchest になるかといった問題の立て方²⁾は、「ごぞらぬ」か「ごぞらない」のどちらが正しいかという、かのドイツ人の日本語教師の問題の立て方に通じているのではあるまいか。練習問題で waschen の過去形の 7 つの人称変化形すべてを入門期の学生に無理強いしようとするのは、結論を急ぐわけではないが、同じあやまりではないか、文法の説明と練習の指導が役目の語学教師の自己満足にはなっても学習者にとっては有害無益ではないかというのが現時点での私の考え方である。

本稿では初級文法読本およびその他の資料でドイツ語の動詞の人称変化形を実際にかぞえてみることで個々の人称変化形の重要度を検討する。私の結論は文法での各人称変化形の扱いには差を付けるべきであるというものだ。ちょっと大げさな言い方になるし、もちろんこれまでの自分の教え方に対する反省も含んでいるのであるが、本稿は言わば現状の文法教育の方法に対する私の異議申し立てなのである。

1. 20冊の初級文法読本を対象に各人称変化形をかぞえてみる

まず、日本人のドイツ語学習者が最初に出会うドイツ語である初級文法読本の本文で各人称変化形の頻度を調べてみた。

初級文法読本のドイツ語なら初級文法の問題を考えるうえでも都合がいい。初級文法読本にまったく出てこないような文法項目やほとんど出てこないような文法項目は、これは異論もあるかと思うが、初級文法では扱う必要はないと言えるのではないだろうか。少なくとも、初級文法に必須の部分ではないだろう。

また、初級文法読本ではひとつおりの文法の習得をうながすためにできるだけ幅広い文章が採られているはずであるから、これを利用すれば、現代ドイツ語の基本的傾向がつかめるはずである。それに、かりに内容に問題があって現代ドイツ語の基本的傾向を示すよいサンプルになっていないものがあったとしても、それはそれで批判材料になってくれるだろう。

各人称変化形をかぞえる際のルールを説明しよう。時制の区別は無視した。したがって、一人称といっても、現在形や過去形や現在完了形や過去完了形や未来形や未来完了形（未来完了形の例が実際にあったかどうかは分からないが）の場合があるわけだ。それから、当然、直説法と接続法の両方の動詞形を対象にした。また、命令形もかぞえた。したがって、二人称単数形では、現在形や過去形など以外に *du* に対する命令形もかぞえている。といっても、すべての動詞形をかぞえたというわけではなく、不定詞や現在分詞や過去分詞はかぞえていない。また、*Grüß dich!* や *Grüß Gott!* に出てくる *grüß* は独和辞典では動詞として調べるよりほかになく、不定詞ではないのだから、なんらかの人称変化形であるはずだとも言えるが、これは数にいられていない。分析が難しいうえ、本稿での問題の立て方は学習者に必要な文法規則を探ることにあるから、人称変化形という扱いが不要と判断したからである。*Grüß dich!* や *Grüß Gott!* が使えるためには、おそらく、人称変化の規則からではなく、そのまま覚える以外にないと思われる。同様の理由で、*Danke!* や *Bittel!* もかぞえていない。それから、*Dann ist Gott sei Dank alles doch ganz anders gekommen.* では *Gott sei Dank* の *sei* もかぞえていない。また、人称変化形をかぞえる対象は本文のドイツ語に限った。つまり、練習問題などのドイツ語はかぞえていないということである。また、タイトルや見出しもドイツ語で書いてある場合は対象に含めた。

調査の対象とした 20 冊をあげておこう。調査対象の選定にあたっては、なるべくドイツ人のネイティブスピーカの参加が明らかなもので比較的最近のものを選ぶようにした。

資料とした 20 冊の初級文法読本

- (1) 『ドイツ語入門文法読本パストラール』(早崎守俊/Heinz H. Alber 著、三修社、1993)
- (2) 『ミュンヘン留学』(椛島則子/Werner Hahl/内田俊一著、同学社 1992)。
- (3) 『使えるドイツ語』(Gudrun Gräwe/Jaqueline Berndt/辻善夫/山根宏著、同学社 1993)
- (4) 『大学生のためのやさしく学べるドイツ語』(Erwin Niederer/渡辺信生/宮島隆著、白水社 1993)
- (5) 『文法読本 - ウーリとウーラ』(浦野春樹/Gerhard Müllenbeck 著、改訂 21 版、郁文堂 1993)
- (6) 『直子のドイツ留学 (文法読本)』(倉田勇治/佐藤和弘/Heike Pinnau-Sato 著、郁文堂 1993)
- (7) 『ハロー、アンゲーリカ (改訂版)』(市川明/Konstanze Schmäler 著、三修社 1993)
- (8) 『アクティブ・ドイツ語文法読本』(中山豊/Sabine Werner 著、三修社 1993)
- (9) 『新ドイツ語の世界 - 文法読本編』(三室次雄/Wolfgang Schlecht 著、三修社 1992)
- (10) 『愉快的ドイツ語』(小野寿美子/片岡律子/Randolf Jessl 著、朝日出版社 1993)
- (11) 『ドイツ再発見 - 初級文法読本 -』(宇京早苗/Renate Fromm 著、同学社 1993)
- (12) 『ドイツ語はかんたんだ』(Hermann Troll/福田幸夫著、第三書房 1993)
- (13) 『春のドイツ語』(小塩節著、朝日出版社 1993)
- (14) 『ドイツ - 小さな旅』(早川東三著、朝日出版社 1990)
- (15) 『ドイツ語文法読本 13 課』(谷川浩一/近藤弘/川崎正/赤沢元務著、郁文堂 1989)
- (16) 『ドイツ - ことばの旅・文化の旅』(Wolf Gewehr/木藤冬樹/鈴木直樹著、朝日出版社 1989)
- (17) 『初級読本シュミット家の一日』(河野通泰/Ingrid Kono 著、朝日出版社 1983)
- (18) 『文法読本・マリコのフライブルク』(堀内泰記/Waltraut Ohashi 著、同学社 1990)
- (19) 『ドイツ現代スナップ』(Rainer Holzer/水内透著、白水社 1986)
- (20) 『ヴェルナー家の日々 - ドイツ語文法読本』(Gudrun Wossidlo/Hans-Günther Krauth/中島悠爾著、白水社 1990)

集計結果を次に示すが、使っている記号をまず説明しておこう。アラビア数字の 1、2、3 はそれぞれ一人称、二人称、三人称の意味である。それから、s は単数形を、pl は複数形を表している。二人称にある親称と敬称の区別は敬

称形 (Sie に対応する動詞形) を 2 h とし、二人称単数形 (du に対応する動詞形) は 2 s、二人称複数形 (ihr に対応する動詞形) は 2 pl とした。念のために表の読み方の一例をあげておこう。(1)の文法読本の先頭に 1 s:32(10.8%)と書いてあるが、これは一人称単数形が対象となった初級文法読本の本文に 32 例あったということであり、32 例というのがその文法読本全体に出現する全人称変化形の 10.8%を占めるという意味である。

集計結果

(1)	(2)	(3)
1 s: 32 (10.8%)	1 s: 58 (16.6%)	1 s: 50 (11.7%)
1 pl: 5 (1.7%)	1 pl: 11 (3.1%)	1 pl: 23 (5.4%)
2 s: 16 (5.4%)	2 s: 17 (4.9%)	2 s: 15 (3.5%)
2 pl: 5 (1.7%)	2 pl: 0 (0%)	2 pl: 6 (1.4%)
2 h: 7 (2.4%)	2 h: 13 (3.7%)	2 h: 17 (4%)
3 s: 197 (66.3%)	3 s: 174 (49.7%)	3 s: 211 (49.4%)
3 pl: 35 (11.8%)	3 pl: 77 (22%)	3 pl: 105 (24.6%)
合計: 297 (100%)	合計: 350 (100%)	合計: 427 (100%)
(4)	(5)	(6)
1 s: 16 (8.7%)	1 s: 35 (11.3%)	1 s: 68 (21.6%)
1 pl: 6 (3.3%)	1 pl: 26 (8.4%)	1 pl: 19 (6.0%)
2 s: 1 (0.5%)	2 s: 24 (7.7%)	2 s: 24 (7.6%)
2 pl: 1 (0.5%)	2 pl: 1 (0.3%)	2 pl: 2 (0.6%)
2 h: 8 (4.3%)	2 h: 9 (2.9%)	2 h: 4 (1.3%)
3 s: 120 (65.2%)	3 s: 165 (53.2%)	3 s: 155 (49.2%)
3 pl: 32 (17.4%)	3 pl: 50 (16.1%)	3 pl: 43 (13.7%)
合計: 184 (100%)	合計: 310 (100%)	合計: 315 (100%)
(7)	(8)	(9)
1 s: 40 (16.1%)	1 s: 21 (11.6%)	1 s: 56 (17.9%)
1 pl: 10 (4.0%)	1 pl: 0 (0%)	1 pl: 25 (8.0%)
2 s: 19 (7.6%)	2 s: 5 (2.8%)	2 s: 29 (9.3%)
2 pl: 7 (2.8%)	2 pl: 0 (0%)	2 pl: 1 (0.3%)
2 h: 0 (0%)	2 h: 0 (0%)	2 h: 11 (3.5%)
3 s: 140 (56.2%)	3 s: 117 (64.6%)	3 s: 168 (53.8%)
3 pl: 33 (13.3%)	3 pl: 38 (21%)	3 pl: 22 (7.1%)
合計: 249 (100%)	合計: 181 (100%)	合計: 312 (100%)

(10)	(11)	(12)
1 s: 21 (15.3%)	1 s: 55 (9.8%)	1 s: 11 (6.5%)
1 pl: 11 (8.0%)	1 pl: 20 (3.6%)	1 pl: 12 (7.1%)
2 s: 0 (0%)	2 s: 21 (3.7%)	2 s: 17 (10.1%)
2 pl: 2 (1.5%)	2 pl: 3 (0.5%)	2 pl: 0 (0%)
2 h: 1 (0.7%)	2 h: 37 (6.6%)	2 h: 8 (4.7%)
3 s: 86 (62.8%)	3 s: 332 (59.2%)	3 s: 111 (65.7%)
3 pl: 16 (11.7%)	3 pl: 93 (16.6%)	3 pl: 10 (5.9%)
合計: 137 (100%)	合計: 561 (100%)	合計: 169 (100%)
(13)	(14)	(15)
1 s: 50 (17.1%)	1 s: 31 (16.4%)	1 s: 43 (11.5%)
1 pl: 1 (0.3%)	1 pl: 12 (6.3%)	1 pl: 8 (2.1%)
2 s: 15 (5.1%)	2 s: 10 (5.3%)	2 s: 10 (2.7%)
2 pl: 0 (0%)	2 pl: 0 (0%)	2 pl: 0 (0%)
2 h: 5 (1.7%)	2 h: 20 (10.6%)	2 h: 22 (5.9%)
3 s: 151 (51.5%)	3 s: 105 (55.6%)	3 s: 237 (63.2%)
3 pl: 71 (24.2%)	3 pl: 11 (5.8%)	3 pl: 55 (14.7%)
合計: 293 (100%)	合計: 189 (100%)	合計: 375 (100%)
(16)	(17)	(18)
1 s: 79 (13.8%)	1 s: 53 (17.5%)	1 s: 33 (12.8%)
1 pl: 80 (14.0%)	1 pl: 29 (9.6%)	1 pl: 13 (5.0%)
2 s: 0 (0%)	2 s: 21 (6.9%)	2 s: 21 (8.1%)
2 pl: 0 (0%)	2 pl: 8 (2.6%)	2 pl: 1 (0.4%)
2 h: 71 (12.4%)	2 h: 21 (6.9%)	2 h: 10 (3.9%)
3 s: 303 (52.9%)	3 s: 134 (44.2%)	3 s: 147 (57.0%)
3 pl: 40 (7.0%)	3 pl: 37 (12.2%)	3 pl: 33 (12.8%)
合計: 573 (100%)	合計: 303 (100%)	合計: 258 (100%)
(19)	(20)	(総合)
1 s: 30 (8.3%)	1 s: 46 (11.7%)	1 s: 828 (13.3%)
1 pl: 11 (3.0%)	1 pl: 13 (3.3%)	1 pl: 335 (5.4%)
2 s: 25 (6.9%)	2 s: 23 (5.8%)	2 s: 313 (5.0%)
2 pl: 2 (0.6%)	2 pl: 2 (0.5%)	2 pl: 41 (0.7%)
2 h: 8 (2.2%)	2 h: 12 (3.0%)	2 h: 284 (4.6%)
3 s: 206 (57.1%)	3 s: 230 (58.4%)	3 s: 3489 (55.9%)
3 pl: 79 (21.9%)	3 pl: 68 (17.3%)	3 pl: 948 (15.2%)
合計: 361 (100%)	合計: 394 (100%)	合計: 6238 (100%)

個々の教科書の各人称変化形の割合は細かい点では当然違うわけであるが、頻度の高い人称変化形の順位は全体的に見てかなり共通している。20冊の初級文法読本のどの教科書をとっても使用率がもっとも高いのは三人称単数形である。しかも、頻度は非常に高く、単独で全体の過半数を占めている。20冊の初級文法読本に出てくる全部の人称変化形を合計すると6238例になるが、三人称単数形はなんとその55.9%にあたる3489例なのである。調べる前からある程度予想はついたがこれ程までとは私自身思わなかった。三人称単数形の次に頻度が高いのが三人称複数形と一人称単数形で、総合結果の比率はそれほど違わない。20冊の合計で三人称複数形が948例あって15.2%なのに対して、一人称単数形は828例で13.3%である。総合順位2位と3位の三人称複数形と一人称単数形であるが、20冊の教科書を個々に見れば、順位は一定していない。三人称複数形が2位になるのは12冊(内1冊は一人称単数形と2位を分け合っている)で、残りの8冊で三人称複数形は3位以下に後退している。しかも、(9)と(12)と(14)と(16)では5位に転落している。それに、三人称複数形は教科書によって使用率の浮き沈みが激しく、使用率が20%を越える教科書が5冊もある一方で、使用率が低いほうでは、(14)が5.8%だし、(12)が5.9%、(16)が7.0%、(9)が7.1%と両者の開きは大きい。一方の一人称単数形は1冊が三人称複数形と同率で、8冊の教科書で三人称複数形の比率を上回っている。また、一人称単数形はどの教科書においても平均して使用されていて、20冊中7冊で順位が2位(内1冊は三人称複数形と同率)だし、12冊で3位である。使用率が上位3位以内にはいないのは1冊だけで、人称変化形の分布がかなり特殊な(12)だけである。ということは、三人称複数形にくらべると、一人称単数形の頻度は文章の種類や内容による影響があまりないということであるし、また、反対に、三人称複数形の頻度は文章の種類や内容によって影響を受けやすいのだと考えられる。上位3位以内にはいる人称変化形がこの3つ以外だという教科書は、上で三人称複数形の使用率がきわめて低いと述べた(9)と(12)と(14)と(16)の4冊だけである。(12)の人称変化形の分布はかなり特殊で、三人称単数形について使われているのが二人称単数形で、その次が一人称複数形である。(9)と(14)では三人称単数形の次に使用頻度が高いのが一人称単数形という点では共通している。(9)では一人称単数形の次が二人称単数形、その次が一人称複数形となっている。(14)では一人称単数形の次が二人称敬

称形、それから一人称複数形が来て、三人称複数形はその次である。(16)では三人称単数形の次が一人称複数形で、差はほとんどないが、その次に一人称単数形と二人称敬称形がこの順番で続いている。三人称複数形と一人称単数形の順位をめぐってやや詳しく考察したが、三人称単数形、三人称複数形、一人称単数形、この三つの人称変化形の使用頻度で一番大事な点は、他の人称変化形がかすんでしまうほどに使用頻度が抜きんでているということである。20冊の初級文法読本全体で6238例の人称変化形があったわけであるが、なんとその84.4%の5265例がこの三つの人称変化形で占められているのである。

また、一番使われていない人称変化形が二人称複数形だという点もほとんどの文法読本で共通している。命令形もかぞえているにもかかわらず、20冊のうち7冊で二人称複数形はまったく使われていない。一番多く使われている(7)の文法読本でも教科書全体で7例あっただけで2.8%にしかない。20冊全体でも6238例中41例しかなく、0.7%を占めるに過ぎない。

一番使用頻度が少ない人称変化形が二人称複数形だというのははっきりしているが、その次に使われていない人称変化形を探すとすると容易ではない。総合結果でも一人称複数形が5.4%、二人称単数形が5.0%、二人称敬称形が4.6%とほぼ横並びである。20冊の教科書を個別に見ても、順位は入れ替わることが多く、この三つの人称変化形の重要度をここでの結果をもとにうんぬんするのは無理である。ただし、この三つの人称変化形は文章の内容によっては頻度と重要度が大巾に変わる。ラジオドラマや会話中心の文章を対象に人称変化形をかぞえると二人称単数形の比率がぐんと上がるし、企業や団体が出す広告や案内のようなものでは一人称複数形が増えたり、二人称敬称形が増えたりする。具体例はあとで見ることにする。

二人称単数形の結果で注意を引くのは、たぶん意図的に使われていない教科書があることである。二人称単数形の使用例がない教科書は(10)と(16)で、1例だけ使用例があるのが(4)だ。(16)と(4)では敬称の二人称のほうは使われているから、親称と敬称の二人称で敬称の二人称を選択した結果親称の二人称単数形がまったく使われていないのだと推定される。(10)は二人称敬称形も1例しかなく、二人称単数形が使われていないのは教育的配慮の結果とも思えない。人称変化形の使われ方が標準的ではない教科書のひとつである。

一方、二人称の敬称のほうがたぶん意図的に使われていない教科書もある

ようだ。(7)と(8)がそうである。この場合は、親称と敬称の二人称で敬称ではなく親称の二人称のほうを選択したということになるだろう。大学生のように若い学習者を想定すれば、敬称の二人称よりも親称の二人称のほうが重要という立場も分からないことはない。

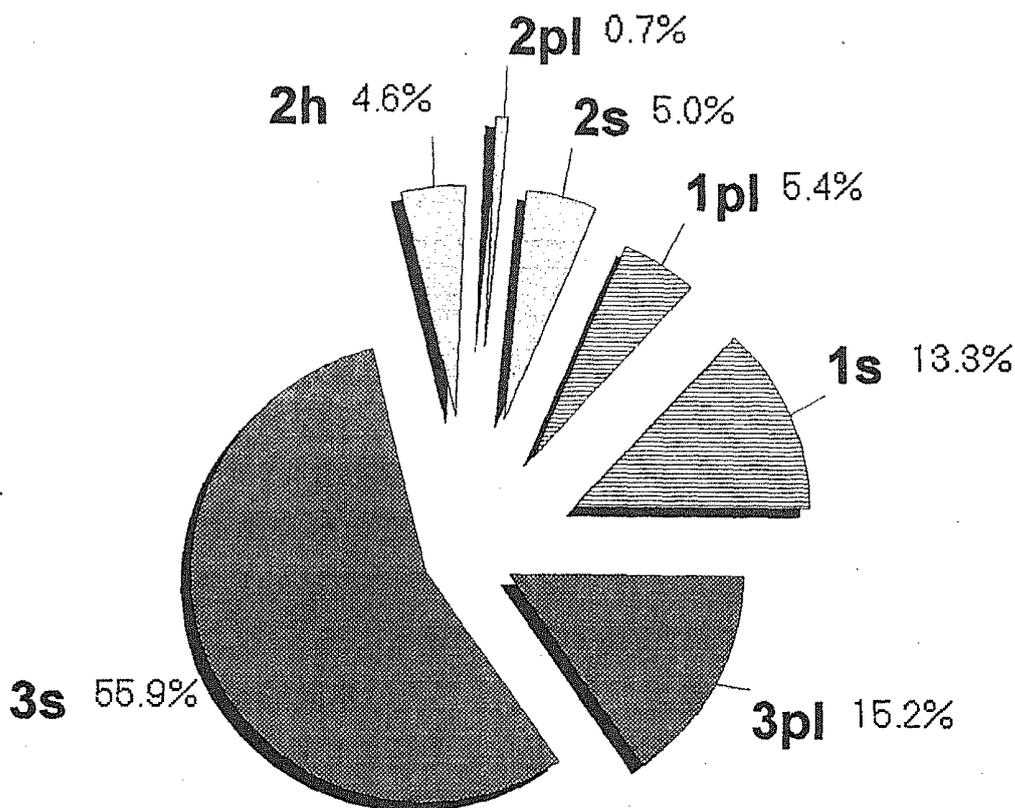
以上、20冊の初級文法読本で各人称変化形をかぞえた結果をやや詳しく述べたが、とくに重要だと思われる点を箇条書きにしてまとめておこう。

- ▶動詞の人称変化形の分布は偏っていて、よく使われる人称変化形とほとんど使われない人称変化形がある。
- ▶使用頻度が高いのは三人称の単数形と複数形と一人称単数形である。この三つで全体の84.4%である。とくに高いのが三人称単数形で、単独で人称変化形全体の過半数を占める。
- ▶二人称の頻度が全体的に低い。単数形、複数形、敬称形とあわせても全体で10.3%にしかになっていない。
- ▶使用頻度が一番低いのは二人称複数形である。ほとんど使われていない。
- ▶人称変化形の分布が特殊な教科書がある。

次ページにのせるのは総合結果を円グラフにしたものだが、上でまとめた5点のポイントのうち最後のポイントを除く4点が円グラフで確認できるのでよく見てほしい。

さて、20冊の初級文法読本で人称変化形をかぞえた結果についてはこれだけなのであるが、ドイツ語教育の観点からこの結果を考えておこう。

まず、7つの人称変化形がすべて同じように重要で初級文法でこれを習得することがドイツ語の基本として必要不可欠だというのはどうやら根拠のないことのようにだ。重要な人称変化形は三人称単数形と三人称複数形と一人称単数形だということがはっきりしているのだから、まずこの三つを最初に学習するのが順当だろう。また、初級文法の教科書で二人称複数形を教えない教科書はたぶんないだろうから、ほとんど必要でもない人称変化形までも早い段階で習得することを要求していることになる。こういう非効率的なことはもうやめてしまっていないのではないだろうか。二人称複数形は20冊中7冊



20冊の初級文法読本における各人称変化形の割合

の初級文法読本で一度も出てきていないのだから、かなりの学習者は文法の教科書以外では一度も出会わないドイツ語のために二人称複数の現在人称変化形だとか過去人称変化形だとか命令形だとかを学習させられているわけだ。二人称複数形は、初級文法で触れるにしても、とくに練習する必要はないのではないだろうか。むしろ、覚えるのは後回しにするよう積極的に指示するべきだと考えられる。

また、初級文法読本のなかには (10) や (12) や (16) のように各人称変化形の割合が標準的とは言えないものもあるようだ。人称変化形の学習はドイツ語の文法を学習する際の重要でやっかいな項目のひとつであるし、文法の学習をしながら実際のドイツ語にも触れるという本来の文法読本の趣旨から考えても、人称変化形の標準的な分布からあまりにも逸脱するのは初級文法読本としての適性をやや欠いているということになるだろう。それに、ドイツ語との接触は初級文法読本だけでおしまいという学習者もかなり出てくる昨今の第二外国語の状況を考えると、教科書作りの際にはこれまで以上に慎重に文章を選定する必要があるはずである。

ドイツ語の各人称変化形の割合について考えるのに、ここでは日本で使われている初級文法読本の本文の内容を対象にした。したがって、それではドイツ語一般に通じる結論とはできないという考えかたもありうるだろう。そこで、次では、初級文法読本以外の文章やドイツで出されている語学教材、ラジオドラマなどを対象にして各人称変化形の割合についてこれまでに述べた内容を検証し、そしてさらに、文章の種類と人称変化形の割合というテーマも追及したい。

2. 三人称単数形の使用率が高いのは普遍的である

三人称単数形は20冊の文法読本では人称変化形全体の55.9%を占め、その他の人称変化形の頻度を大きく引き離していた。もちろん、文章の種類によって動詞の人称変化形の構成や割合がかなり変わるというのは事実である。あとでそういう例も見る。しかし、三人称単数形がもっとも頻度の高い人称変化形だという点に関しては、ichを主語にした自己紹介の文章など、よほど特殊な文章をえらばない限り、変わりそうにない。しかも、文章の種類によっては三人称単数形の比率は20冊の初級文法読本での総合結果55.9%を大幅に上回ることもあるようだ。

たとえば、ニュースなどになると、普通、三人称の動詞形しか出てこない。ドイチェ・ヴェレの実際の放送をもとにつくられたドイツ語の教科書（須磨一彦／松島富美代／高木真理子著、『世界を聞くードイチェ・ヴェレで』白水社 1993）のニュースの部分（6～27頁）でしらべてみると、三人称以外の人称変化形は出てきていない。

(21) 『世界を聞くードイチェ・ヴェレで』

1 s:	0	(0%)	1 pl:	0	(0%)
2 s:	0	(0%)	2 pl:	0	(0%)
2 h:	0	(0%)			
3 s:	100	(68.5%)	3 pl:	46	(31.5%)
合計:	146	(100%)			

次にあげるのはケルンフィルハーモニーのチケットの購入方法や販売場所、座席の分類などを説明した1ページの文について人称変化形をかぞえた

結果である。こういう内容では発信者のケルンフィルハーモニーは一人称複数形の wir で表わされることになるし、ケルンフィルハーモニーのチケットに関心をもっているチケットガイドの読者は二人称敬称形の Sie で呼びかけられている。このような内容では親しい間柄の受け手を表す二人称親称形の du や ihr や一人称単数形の ich のはいつてくる余地はない。しかし、この場合でも、三人称単数形は二人称敬称形と並んで一番多く使われている人称変化形であるし、三人称複数形と合わせて全人称変化形の 50% を占めている。

(22) 「ケルン・フィルのチケット購入ガイド」

1 s:	0	(0%)	1 pl:	12	(19.4%)
2 s:	0	(0%)	2 pl:	0	(0%)
2 h:	19	(30.6%)			
3 s:	19	(30.6%)	3 pl:	12	(19.4%)
合計:	62	(100%)			

ドイツの郵便局で出している当座預金について解説した広告の文章もかぞえてみた。これは 1991 年に作成されたもので、表紙も合わせて 8 ページの小冊子である。ここでもケルンフィルのチケット・ガイドと同様に情報の受け手は二人称敬称形の Sie で表わされているが、一人称複数形の wir は使われていない。文体によっては「私たち」は使わなくても「郵便局」などの団体名の名詞を使うことで情報の発信者が表現できるためである。名詞を主語にすれば動詞は必然的に三人称の人称変化形だ。そのためか、チケット・ガイドの結果とくらべると一人称複数形の wir が使われていない分だけ三人称単数形の比率が高くなっているような結果になっている。いずれにしても、郵便局の案内でも三人称の比率は高く、48.6% の単数形と 17.1% の複数形を合わせると 65.7% の高率になる。

(23) 「当座預金の案内」

1 s:	0	(0%)	1 pl:	0	(0%)
2 s:	0	(0%)	2 pl:	0	(0%)
2 h:	38	(34.2%)			
3 s:	54	(48.6%)	3 pl:	19	(17.1%)
合計:	111	(100%)			

「ケルンフィルのチケット購入ガイド」でも「当座預金の案内」でも三人称単数形が依然高頻度で、もっとも頻度の高い人称変化形であることを確認した。それでも、文章の内容によっては三人称単数形もそれほど使われていないのではないかと、という疑いを抱くひとがあるかもしれない。おそらく探せばそんな文章もどこかにあるだろう。しかし、ほとんどどんな文章でも三人称単数形がもっとも頻度の高い人称変化形である。だから、三人称単数形がちょっと予想されないような文章でも三人称単数形がもっとも多く使われている人称変化形なのである。週刊誌 STERN の最終ページは、毎回、過去に話題になったり有名だったひとに対してのインタビュー記事が掲載されている。インタビューする側は二人称敬称の Sie を使って質問をし、インタビューされる側は一人称単数の ich を使って、自分の過去を語り、また近況を語るというパターンの内容である。それなら記事に出てくる動詞の人称変化形は一人称単数形と二人称敬称形ばかりかということ、そうではない。1994 年の 5 号、6 号、7 号を調べた結果では、いくらか減少するもののもっとも頻度の高い人称変化形はやはり三人称単数形だった。なお、かぞえる際には写真に付く説明だとか、Mit Marita Breuer sprach STERN-Redakteur Rolf Dieckmann. などの部分は三人称単数形が使われて当たり前の部分なので対象から除外し、記事の本文の対話の部分だけをかぞえてある。

週刊誌 STERN の記事から

(24) STERN 5/1994	(25) STERN 6/1994	(26) STERN 7/1994
1 s: 16 (33.3%)	1 s: 11 (27.5%)	1 s: 15 (34.9%)
1 pl: 0 (0%)	1 pl: 2 (5%)	1 pl: 0 (0%)
2 s: 0 (0%)	2 s: 0 (0%)	2 s: 0 (0%)
2 pl: 0 (0%)	2 pl: 0 (0%)	2 pl: 0 (0%)
2 h: 7 (14.6%)	2 h: 6 (15%)	2 h: 7 (16.3%)
3 s: 20 (41.7%)	3 s: 17 (42.5%)	3 s: 15 (34.9%)
3 pl: 5 (10.4%)	3 pl: 4 (10%)	3 pl: 6 (14.0%)
合計: 48 (100%)	合計: 40 (100%)	合計: 43 (100%)

3. 「会話」と「読み物」をくらべる

三人称とくに単数形の割合が文章の種類に依らず高いことは意外な感じがするが、実は会話を扱った文章でもそれは変わらない。読み物ではなく会話を中心の教材でも三人称単数形がもっとも頻度の高い人称変化形なのである。会話がなされるのだから、話し手の「私」を主語にする人称変化形の一人称単数形や話し相手を主語にする人称変化形である二人称単数形あるいは二人称敬称形の頻度が高くなるのは当然のことだろう。ただし、ちょっと注意しなければならないのは、会話の文章を対象にしても二人称複数形の頻度はほとんど高くないということである。おそらく、会話は普通ふたりの人間のあいだでなされ、話し相手は単数であるということ、それに、その場に居合わせる聞き手役の人間が複数いたとしても話しかけられる相手つまり典型的な話し相手は多くの場合単数だということと関係していると思われる。

とにかく会話を扱った文章と読み物では人称変化形の構成や割合がかなり変化しそうである。そのため、実は、各人称変化形を初級文法読本でかぞえた際にも、登場人物の会話だけが本文になっているような教材は選んでいない。偏りが最初から予想されたからである。次に、そんな、ほぼ登場人物の会話だけで構成されている初級文法読本で人称変化形をかぞえた結果を示そう。

(27) 『サチコのドイツ体験』(志田裕朗/Bernhard Neuberger/橋本政義著、白水社 1993)

(28) 『ハロー・ミュンヘン』(関口一郎著、白水社 1993)

(27) 『サチコのドイツ体験』

1 s:	91	(30.8%)
1 pl:	9	(3.1%)
2 s:	26	(8.8%)
2 pl:	1	(0.3%)
2 h:	43	(14.6%)
3 s:	105	(35.6%)
3 pl:	20	(6.8%)
合計:	295	(100%)

(28) 『ハロー・ミュンヘン』

1 s:	69	(22.8%)
1 pl:	16	(5.3%)
2 s:	14	(4.6%)
2 pl:	0	(0%)
2 h:	28	(9.2%)
3 s:	151	(49.8%)
3 pl:	25	(8.3%)
合計:	303	(100%)

『サチコのドイツ体験』は最後の1課が手紙になっているほかは、登場人物の会話が本文の内容を構成している。『ハロー・ミュンヘン』は独白や解説がときおり混じるほかは、本文が登場人物の会話だけでできている教材である。会話が中心だと一人称単数形、それに二人称単数形あるいは実質は単数形の使用がほとんどだと思われる単複同形の二人称敬称形の比率がふえると予想されるが、事実ほぼその通りの結果になっている。20冊の初級文法読本の結果と比べてみると違いははっきりしている。20冊の総合結果で一人称単数形の比率は13.3%だった。それが『サチコのドイツ体験』では30.8%だし、『ハロー・ミュンヘン』では22.8%だ。また、二人称敬称形では、総合結果が4.6%に対して、『サチコのドイツ体験』が14.6%、『ハロー・ミュンヘン』で9.2%になっている。ただし、二人称単数形では、総合結果が5.0%で、『サチコのドイツ体験』が8.8%と20冊の総合結果を上回っているが、『ハロー・ミュンヘン』では4.6%と逆にわずかであるが総合結果の比率を下回っている。おそらく、外国人の大人の学習者がまず必要なのは二人称敬称だという理由で意識的に親称の二人称単数形をあまり使わなかったのだろう。20冊の初級文法読本でも(4)と(16)が教育的配慮で二人称敬称のSieを選んでいった。

会話主体の内容と言えば、ラジオドラマのようなものもそうである。(29)はDie Sonne des fremden Himmels. (Benno Meyer-Wehlack/Irene Vrkljan)で、(30)はWer fürchtet sich vorm schwarzen Mann? (Marie Luise Kaschnitz)である。結果を見ると、やはり、一人称や二人称の単数形が多くなっている。(29)では一人称単数形が21.3%、(30)では17.5%である。二人称単数形の場合は(29)が14.4%、(30)が12.4%である。二人称敬称形はあまり使われていないが、これはラジオドラマの内容次第であろう。親しい間柄の登場人物のあいだで交わされる会話しか出てこないようなラジオドラマであれば、当然二人称敬称形は出てこない。また、一人称単数形や二人称単数形が比較的多く出現すると言っても、やはり、もっとも頻度が高いのは三人称単数形である。(29)では45.2%だし、(30)では51.6%だ。20冊の初級文法読本の結果が55.9%だから、やや低くはなっているが、依然かなりの高水準である。

ラジオドラマ

(29)		(30)
1 s:	260 (21.3%)	1 s: 65 (17.5%)
1 pl:	122 (10.0%)	1 pl: 17 (4.6%)
2 s:	176 (14.4%)	2 s: 46 (12.4%)
2 pl:	7 (0.6%)	2 pl: 1 (0.3%)
2 h:	3 (0.2%)	2 h: 10 (2.7%)
3 s:	551 (45.2%)	3 s: 192 (51.6%)
3 pl:	99 (8.1%)	3 pl: 41 (11.0%)
合計:	1218 (100%)	合計: 372 (100%)

三人称の人称変化形が多いのは、会話の話題になるのは話し手自身のことや聞き手自身のことであるというよりは、第三者や事物のことが中心であるからと説明できる。また、聞き手や話し手が話題になっていても、Wie geht's dir? Es geht mir gut. のような文では、動詞の人称変化形は一人称単数形や二人称単数形ではなく、三人称単数形になることも忘れてはならない。

(27) や (28) の会話中心の初級文法読本でもここで見たラジオドラマの場合でもそうだが、会話中心の文章では三人称単数形の頻度が多少低くなり、その代わり一人称単数形や二人称単数形の頻度が高くなる。また、(21) で見たニュースの例では三人称の単数形と複数形しか使われていなかった。つまり、文章の種類によって各人称変化形の割合はかなり変わるわけで、各人称変化形の偏りをなるべく少なくするには、文章の種類はいろいろ取りそろえる必要がある。そのためだと思うが、ドイツで出版されている外国人向けのドイツ語の教科書のなかにも会話と読み物を対にして出しているものもある。Deutsch Eins für Ausländer とその続編の Deutsch Zwei für Ausländer (両方とも Christof Kehr/Michaela Meyerhoff, rororo 1991) がそんな教科書だが、各課の本文の構成は常に「会話 (Dialog)」と「読み物 (Lektüre)」の2本立てになっている。したがって、「会話」と「読み物」を対比するのに好都合である。それでは、まずかぞえた結果を次ページに示そう。

「会話」と「読み物」の比較をする前に、まず、Deutsch Eins für Ausländer と Deutsch Zwei für Ausländer のふたつのあいだの違いに触れておこう。各人称変化形の割合が示す傾向は「会話」の場合それほど大きなずれは見られない。それどころか、極めて似通ったパターンを示している。三人称単数

(31) Deutsch Eins für Ausländer

(a) 「会話」			(b) 「読み物」		
1 s:	185	(27.3%)	1 s:	31	(9.8%)
1 pl:	48	(7.1%)	1 pl:	6	(1.9%)
2 s:	100	(14.8%)	2 s:	21	(6.6%)
2 pl:	6	(0.9%)	2 pl:	1	(0.3%)
2 h:	102	(15.1%)	2 h:	11	(3.5%)
3 s:	216	(31.9%)	3 s:	227	(71.6%)
3 pl:	20	(3.0%)	3 pl:	20	(6.3%)
合計:	677	(100%)	合計:	317	(100%)

(32) Deutsch Zwei für Ausländer

(a) 「会話」			(b) 「読み物」		
1 s:	132	(22.8%)	1 s:	0	(0%)
1 pl:	45	(7.8%)	1 pl:	6	(2.3%)
2 s:	96	(16.6%)	2 s:	2	(0.8%)
2 pl:	0	(0%)	2 pl:	0	(0%)
2 h:	60	(10.3%)	2 h:	1	(0.4%)
3 s:	191	(32.9%)	3 s:	154	(58.8%)
3 pl:	56	(9.7%)	3 pl:	99	(37.8%)
合計:	580	(100%)	合計:	262	(100%)

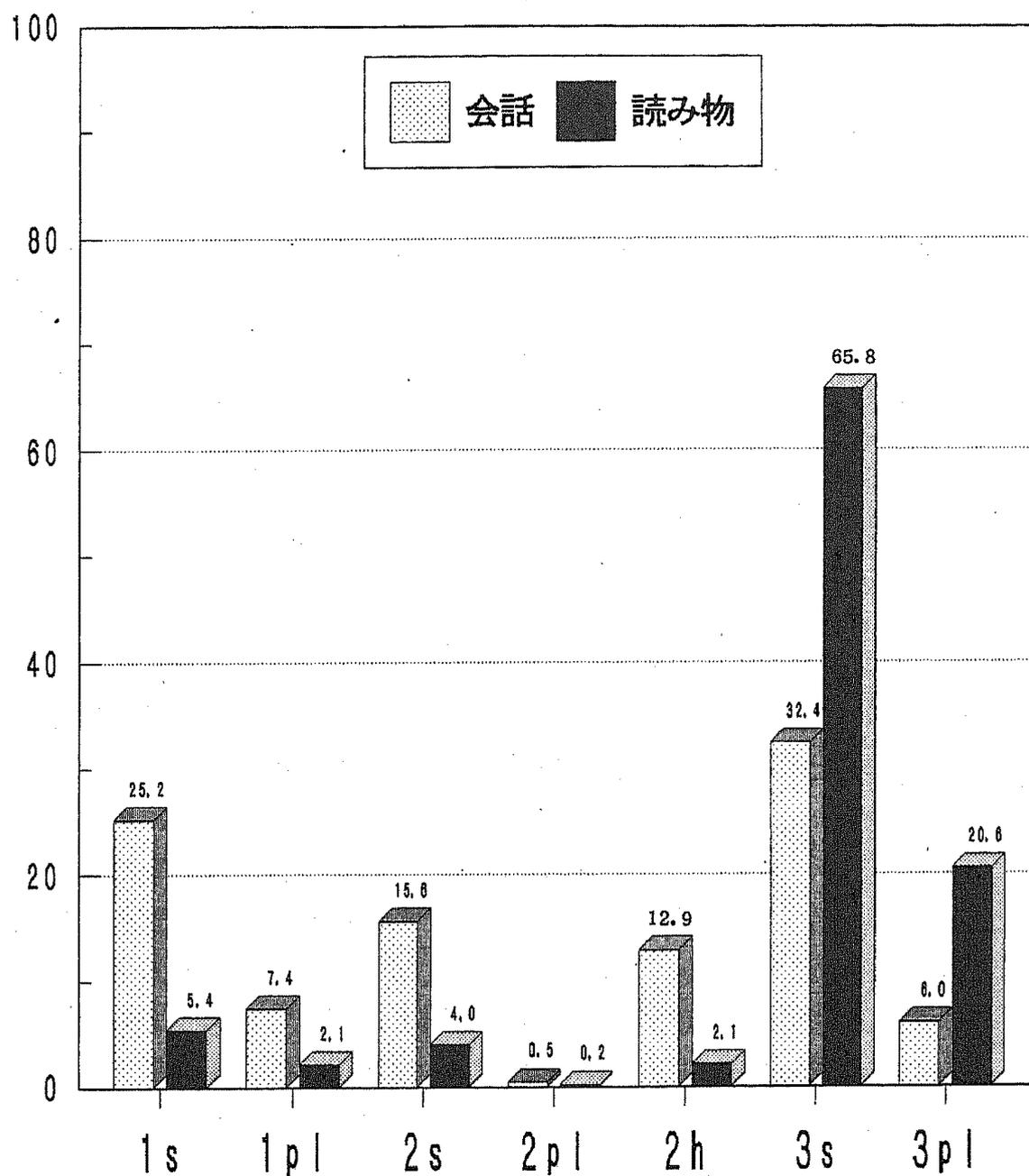
形など、前編で31.9%、続編で32.9%だ。三人称複数形で前編の3.0%から続編の9.7%に上昇しているのぐらいが目立った違いだろうか。一方、「読み物」では多少パターンが違ってきているようだ。続編では三人称複数形の比率が37.8%と前編の6.3%にくらべて大幅に増え、一人称単数形の比率が9.8%から0%に激減している。おそらく続編が示す傾向のほうが読み物本来のパターンに近いのだと思うが、人称変化形の構成がほとんど三人称の人称変化形だけである。

それでは、「会話」と「読み物」における人称変化形の構成や割合について考察してみることにしよう。まず、(31)と(32)を合計した結果を「会話」と「読み物」に分けて各人称変化形の棒グラフにしてみる。「会話」に出てくる人称変化形が全体で1257例(677+580)と「読み物」の579例(317+262)の2倍以上もあるので、そのままの実数で比較してもあまり意味はないのでパーセントで「会話」と「読み物」における各人称変化形の比率の違いを比較する。

「会話」と「読み物」の各人称変化形の割合

(実数ではなくパーセントを比較したもの)

(パーセント)



「会話」では一人称単数形の割合が高く、25.2%で三人称単数形の32.4%に迫る勢いである。初級文法読本の結果では13.3%だったから、はるかに高い割合を示している。また、人称変化形の多様性ということでは会話を扱ったもののほうが「読み物」とくらべてはるかに多様で、各人称変化形が比較的平均的に使われている。対する「読み物」では三人称の使用だけが目立っている。したがって、会話を扱った文章のほうが人称変化形の学習により適していると見ることができる。一方、「読み物」ではひどく三人称に偏った使われ方であることがグラフから読み取れる。この結果をもとに判断すれば、読み物を中心にしたドイツ語学習は人称変化形の習熟という観点ではまったく不十分であると断定できる³⁾。もちろん、そうはいっても、文法項目によっては適性も変わりうるわけで、すべてにおいて会話のほうが初級文法の学習に適しているとは結論できないだろう。複文構造など会話にはそれほど出てこない文法項目というのも予想されるから、月並みな主張ではあるが、両者は適当に組み合わされるのがよいのだろう。また、会話重視の語学教育ということを考えるなら、会話で必要な一人称単数形や二人称単数形や二人称敬称形の比率が極めて低い読み物ではなんらかの方法でこれらの三つの人称変化形を補う必要があるということになる。

4. おわりに

ドイツ語の人称変化形に重要度の違いがあるなら、本来、それはドイツ語を母語とする人であれ日本人のドイツ語学習者であれ基本的には共通しているはずである。しかし、ドイツ語を意識的な文法学習によって学ぶ日本人のドイツ語学習者にとって文法の内容はネイティブスピーカ以上に重大な意味をもつのではないだろうか。ネイティブスピーカならとくに効率的な学習法や文法を意識しなくても通常は外国人にはとても到達できないような言語能力を身に付けるわけであるが、ネイティブスピーカほどに時間のかけられない外国人学習者の場合は無駄の多い方法や効率の悪い学習をしていたのでは実用的な外国語の能力などとても身に付けられない。それゆえの文法ということになるはずなのであるが、現状の文法の内容は必ずしも外国人の学習者向けに出来ていない。効率的な外国語学習を可能にしてくれる内容になっていないのである。動詞の人称変化形の文法での扱いはそのいい例である。20冊の初級文法読本の結果で言えば、0.7%の二人称複数形も55.9%の三人称

単数形も同列に扱われているわけである。各人称変化形の重要度や学習における必要度がまったく考慮されていない。

こういう文法をもとにしたドイツ語学習がそれほど実をむすばなくても不思議ではない。私自身が動詞の人称変化形を学習したときのことを振り返ってみても、7つの人称変化形を一度に習い、それを一度に覚えようとしたことは確かであるが、もちろん一度にうまく覚えられるはずはなかった。それどころか、人称変化の規則を思い出し、それを適用するための作業時間をそれほど取られることもなくある程度すばやく7つの人称変化形全部がつかれるようになったのは実はドイツ語教師を何年もやって文法の授業で7つの人称変化形全部を教えるようになってからだと思う。本稿の調査結果をもとに判断すれば、私の「物覚えの悪さ」は当然の結果だったと思う。なぜなら文法の授業以外で7つの人称変化形全部に出会うことはほとんどないからだ。

それでは、初級文法に必要な不可欠な人称変化形はどれとどれなのだろうか。私の個人的な意見も含めて述べると、初級文法では三人称の単数形と複数形と一人称単数形を重視した教え方でいいのではないかと思う。会話を重視した教育を行うなら、当然、二人称の人称変化形についての知識も必要になってくるが、成人の外国人の学習者としてはとりあえずは敬称の Sie に対応する人称変化形で済ませるということも可能だろう。これだったら形は三人称複数形と同じだ。文法学習においては、普通、すべての人称変化形をまず習い、その後で過去形や現在完了形を習っているが、まず三人称の人称変化形や一人称単数形などで現在形、過去形、現在完了形などを学習するほうが実践的であるし、自然なドイツ語における頻度を反映した学習法であると思われる。

ところで、ドイツ語では動詞以外にも複雑な語形変化をする品詞が多い。定冠詞や不定冠詞や冠詞類がそうであるし、関係代名詞などもそうである。被修飾名詞や先行詞が男性名詞であるか、女性名詞であるか、あるいは中性名詞であるかに対応して形を変えるし、単数・複数の区別や1格から4格までの格の区別が理論的には可能で、不定冠詞のように複数形に対応する形がないものもあるが、基本的には合計16種類の変化形がある。しかし、この16種の変化形にしても初級文法の段階ですべてを教えることが必要なのだろうか。動詞の人称変化形の二人称複数形のようなほとんど使われないものも混じっている可能性があるのではないだろうか。本稿で考察した動詞の人称変

化形と密接な関係の人称代名詞にしても、使用頻度は動詞の人称変化形のそれに対応しているようだ。動詞の二人称変化形の使用頻度がきわめて低いということは、当然、二人称複数の人称代名詞の1格 ihr の使用頻度が低いということであるが、1格だけでなく、たとえば3格と4格の euch の使用頻度も微々たるものである。Duden の10巻 Bedeutungswörterbuch のパソコン用のソフトになったもの (PC-Bibliothek, Bibliographisches Institut & F. A. Brockhaus AG 1993) で見出し語ならびに辞書の全内容を検索させてみると、一人称単数の mich は全部で334箇所に出てくる。一人称複数の uns だと210箇所であるし、二人称単数の dich は169箇所だ。これが三人称単数で男性名詞に対応する ihn になると630箇所も使われている。ところが、二人称複数の euch という形は4格だけでなく3格でも使われる形態であるにもかかわらず一冊の辞書を丸まる調べさせても22箇所でしか使われていない。頻度の違いは明々白々である。

一般に、文法項目として幾つかの変化形が問題になる場合、個々の変化形の重要度の違いに関する情報は効率的な外国語学習のための文法に組み込まれるべきものであると私は考える。すべての変化形を網羅的に表にまとめるという方法は文法においてこれまで伝統的に採用されてきたが、文法のための文法とでも言うべきものであったのではないかと思う。二人称複数に関連している文法項目は、動詞の人称変化形であれ、人称代名詞であれ、所有代名詞であれ、命令形であれ、読み書きのための文法に必要なだったとは思われないし、話すためや聞くための文法に必要なだったとも思えない。文法が文法として完全であるために必要だったとしか解釈しようがないのではないだろうか。文法に「完全な表」をもとめるような完全主義は見直される時期に来ている。もちろん、見直しにあたっては緻密な研究がもとにされなければならないのは言うまでもない。そして、十分な検討を経た上で、必要のない変化形があれば省略するべきだし、省略しない場合でもたんに表のかたちですべての変化形を示すような安易な行き方ではなく、少なくとも重要度などの表示をして学習者がその文法項目を学習する際の優先順位を示すべきだ。

注

1. was の 2 格の wessen や 3 格の wem は古いドイツ語では使用例があったのかもしれないが、ドイツ語教師をしている私でさえこれまでに出会ったことがない「語」である。初級文法ではさすがに wessen や wem などという形は習わなくなっていると思われるが、辞書や参考書では話は別で、たとえばマイスター独和辞典(大修館 1992)ではいまだに wessen と wem を出している。手持ちのドイツ文法の参考書をいくつか調べてみると、かなり古いものでも 3 格の wem は出していない。2 格の wessen については、羽賀良一著『ドイツ文法辞典』(南江堂 1956)や塩谷饒著『新編ドイツ広文典』(郁文堂 1964)や桜井和一著『改訂ドイツ広文典』(第三書房 1968)は出しているが、もう少し新しいドイツ文法の参考書になると wessen はかっこに入れられ、まれな形式として提示されるようになってきているようだ。かっこ付きで wessen を出している参考書に Wolfgang Michel/樋口忠治/新保弼彬/小坂光一/吉中幸平著『これからのドイツ語』(郁文堂 1980)や中島悠爾/平尾浩三/朝倉巧著『必携ドイツ文法総まとめ』(白水社 1985)があった。ごく最近のものになると wessen という形は出していないものもあるようだ。そんな例に菊地雅子著『ドイツ文法の入門』(白水社 1986)と宮内敬太郎著『速習現代ドイツ語』(郁文堂 1990)があった。
2. 4000 deutsche Verben—ihre Formen und ihr Gebrauch (Heinz Griesbach in Zusammenarbeit mit Gudrun Uhlig, Max Hueber Verlag 1991)によると、wuschst でも wuschest でもどちらでもよいことになっている。これが Harrap's German Verbs (1988)だと wuschst しか出ていないし、Langenscheidts Verb-Tabellen Deutsch(1975)だと反対に wuschest だけである。しかし、wuschst にしても wuschest にしても実際はほとんどお目にかからない語形だろう。なぜなら、この語形は waschen(「洗う」)という日常的な語がどちらかと言うと文語調の過去形で使われた形だからだ。したがって、wuschst か wuschest かという問題は、問題にしようと思えばできないことはないが、実用上はほとんど無駄な議論であろう。
3. 日本のドイツ語教育においてこれまで中心的な役割を果たしてきた「講読」は読み物を読むのが主体であったわけであるから、テキストに出てくる人称変化形は会話で必須の一人称単数形や二人称単数形や二人称敬称形の頻度も少なく、学生は、ここで見た「読み物」の結果から推定すると、おそらくほぼ三人称の動詞形とだけつきあうことになっていたはずである。したがって、会話の能力や総合的なドイツ語の能力の育成がこれからのドイツ語教育の目標ならば、講読中心の外国語学習は適切な学習法ではないだろう。